

柳澤桂子論Ⅱ

和田 勉

一

生命科学者である柳澤桂子には、『卵が私になるまで』(平5、新潮社)や『二重らせんの私』(平7、早川書房)など専門の生命科学にまつわる著書が多い。そのため、柳澤の短歌は余技と捉えられがちである。そのせいもあつてか、柳澤についての先行研究は皆無に等しい。しかし、その歌は独自の世界を切り拓いていることを本稿では明らかにしたい。

柳澤の短歌について、拙稿「柳澤桂子論」(『国語国文学研究』37、平14・2)で既に考察したことがある。それに追加・修正して『文学と遺伝子』(平17・11、おうふう)に収録した。ここでは主に歌集『冬樹々のいのち』(平10、草思社)と『いのちの声』(平14、河出書房新社)について分析した。本稿では拙著以降の柳澤の短歌について、歌集『萩』(平19、角川書店)と『四季』(平24、角川書店)を中心に、生命科学的な視点から

考察する。また、先行歌集からの歌風の変化やその評価についても見ていきたい。

柳澤は原因不明の病に倒れて以降、「短歌を作ることが支えになっていました。四季の移り変わりや一日の時間の流れを、敏感に感じとるようになりました。草花の美しさ、鳥の姿や月の動きを、前よりも細やかに眺めて、冬の裸木や、土がしんと冷えている情景を短歌にすることは慰めました」(『日本人への祈り』平20、角川春樹事務所)と述べている。このような柳澤の短歌の特質や意義について、現代短歌の中での位置づけなども視野に入れながら言及したい。

ところで、現代を人文科学の言説よりも、生命科学などの自然科学の言説が優先される時代と捉えても、あながち誤りとは言えない。そのような状況の中で、伝統的な叙情による短歌は、どうあるべきかということも改めて検証したい。ここではポエジーとして導入された生命科学の知見が、硬質の叙情としてどのように表出され機能しているかという問題も見えてくるはずである。

二

まず『萩』について読解を試みたい。生命科学的な視点からの分析だけでなく、歌集としての評価にも言及したい。なお、

『萩』に収録された歌には、既発行の歌画集『冬樹々のいのち』に収録された歌も含まれているので、考察の際には既に言及したことがあるそれらの歌には触れないことにする。

右脳だけ眠りし夜の朝ぼらけ痺れが残る左の脳に

マンモスの牙のごとくに伸びていく科学技術が人を滅ぼす
蔓だけを岩に這わせる細き蔦春に芽吹くは神との契り

群れてくる雀も我と同世代縁を思い庭に飯まく

死細胞をマクロファージが貪食す脳はじわじわ死にてゆく
なり

勉
一首目では、空間的・音楽的認知をつかさどる右脳だけ眠つたために、言語的・分析的・逐次的情報処理をつかさどる左脳に疲れが残っているというのである。脳の疲れについて、部位を挙げて解析しているところに特質がある。二首目では、果てしなく科学技術の進展を求める姿を、マンモスの牙という巧みな比喩で表している。ただし、下旬に見られるように歌としては少し概念的なところがある。マンモスの特徴は、身体の前方に長く突き出た丸まった牙を持っているところだが、この牙は一生を通して伸び続ける。マンモスは氷河期が終りを迎えると共に絶滅したと言われているが、ヒトも同様の運命になりかねないというのである。ここで言う科学技術とは、柳澤が『永遠のなかに生きる』（平18、集英社）で述べている、「これから人間たちの前途に大きく立ちふさがるのは、科学のまちがった使

い方です。人間のつくったホルモン作用攪乱物質や放射能によって、私たちの地球は汚染され、生物が住めないような状態になってしまいかもしれません」というようなことを念頭に置いてみるのだろう。なお、科学技術優先の状況の中で、柳澤がクオリティー・オブ・ライフ（Q・O・L）を重視していることは、「肋骨の圧迫痛に苦しみてQ・O・Lの低き旬日」によっても窺える。生活を物質的な面から量的に捉えるのではなく、個人の生き甲斐や精神的な豊かさを重視して質的に把握しようというのであり、生活の質や生命の質が尊重されている。三首目では、春になると自ずから、岩に蔓を這わせるという蔦の姿を冷静に捉えている。そこでは、植物が生命活動を始めるところに神の摂理を見ている。四首目では、長い生命進化の歴史の中で、雀と自分が同じ時間と空間を共有している縁を実感しているのである。偶然同じ時間と空間に生きること、神秘的なつながりを覚えているのである。五首目では、脳内で細胞の残骸が大食細胞マクロファージによって消化されるところをイメージしており、脳細胞の死を冷徹に活写している。専門用語を用いることで、脳細胞の死にリアリティを与えると共に、普段耳慣れない医学用語により、その無気味さを際立たせている。われわれは哺乳類なり友であるSARSが示すいのちのま

こと

雨の中痩せゆく羊歯の葉の裏に胞子をあまた身ごもりており

黒煙と熱湯の噴く深海に群れる生き物神秘は深し

わが脳衰えゆくが身に沁みる紫陽花の花乾きゆくこと

今日死んだ我が細胞を弔わん午前零時に針の合うとき

一首目では、サーズ（重症急性呼吸器症候群）のウイルスと、哺乳類であるヒトは生き物として同朋であると捉えている。サーズは、サーズコロナウイルスという新種のウイルスによって引き起こされる疾患であり、二〇〇二年から二〇〇三年にかけて世界的に流行した。サーズウイルスは、動物ウイルスが人間への感染力を獲得したものとみられており、そのようなところを「友である」と捉えたのであろう。二首目では、羊歯を例に植物の凋落と生命継承を冷徹に捉えている。三首目では、深海の劣悪な環境にも生存する生物に思いを馳せ、生命の神秘ということを思っている。しかも「群れる」ということで、集団で生息しているのである。なお、柳澤は『いのちと環境 人類は生き残れるか』の中で、「現在も、温泉や深海の熱湯のなかで暮らす細菌が見つかっていますが、もっとも古い生物の姿といえます」と記している。四首目では、脳の老化を紫陽花の花の枯れる姿に重ねて巧みに捉えている。ヒトの宿命とはいえず、そこにはやりきれない哀しみが表出されている。五首目では、細胞は毎日新陳代謝を繰り返しているが、今日亡くなった細胞を弔い、感謝の気持ちを捧げたいというのである。生きるというところが日々の営みとして、切実に実感され表出されている。

朝焼けに小さな羽虫は生れあれて死への時間を刻みはじめる

芽吹くものみな尖りおり死ぬときは丸き実になり次代へつ

なく

空青し結婚飛行の雄蜂は交尾途中で息絶えるなり

けものなら死ぬであろうに人ゆえに医学によりて生きて苦

しむ

日を増すにいのちの張りがゆるみゆく秋の終わりの植物の

さま

一首目では、誕生と共に死への時間が刻まれることになるという生命の実相を詠み込んでいる。同集には「生きるとは少しずつ死ぬことと知る萩の揺れ葉に舞う紋黄蝶」とあり、生きるとは死への時間を刻むことという作者の死生観を知る上で参考になる。二首目では、尖った新芽と丸い実とを対照しながら、植物の生命継承について思っている。芽と実の形態についての細かな観察が、この歌では効果的に活かされている。三首目では、受精と共に一生を終える雄蜂の姿を活写している。背景が昼間の青空であることで、何ごともないかのような空虚がかえって際立つようになっていいる。四首目では、自然界においては病んだり老いたりした獣は真先に犠牲になるであろうと想像を働かせ、翻って医学によって生かされる人間の生存について問いかけていいる。医学によって生かされていることのありがたみと、病の苦しみに耐える辛さの混じった心境が吐露されてい

る。五首目では、晩秋になり植物の凋落する様子が描き出されている。自然についての季節詠でありながら、それを見つめる作者自身の哀感を滲ませている。

『萩』では、まさに川端康成が説いたような「末期の眼」に映し出されたこの世の実相が、哀感をもって描写されている。川端が述べた「自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである」（「末期の眼」というような境地に通うのである。これがこの世で見納めかもしれないという柳澤の思いがあるために、現実の諸事象の命が危機迫るものとして活写されている。

「私を終わらす時期が迫りくるこのようにしか生きられなかった」や「今までが仮縫いならば来世はげに美しき一生ひとよを生きん」等の歌に見られるように無念と悔いが切実に表出されている。一方で、「ラヴェンダーの野に寝てみたいその次は波打ち際を歩いてみたい」というように、人生で叶えられなかった願望が素直に表出されている。

「父の膝にすっぽり座り朝刊の匂いをかぎし幼日ありき」「空き地にはえのころぐさが群れていて缶蹴りをしたあの頃のこと」のような幼年期を回想した歌や「豊かなる乳を飲ませし日もありき春はふたたび巡らぬものを」のような若い頃を回想した歌もある。これらの歌には、走馬燈のように一生を振り返る視点が効果的に働いている。

「海の上に月がちつとも出ないので鯨の子供夜ごとにくぐずる」

のように、メルヘンの傾向を帯びる歌が見られるのも特質として挙げることができる。生命は海から進化してきたが、そのような生命の故郷である海への遥かな思いもある。それは「岩棚に休んでいるか沖鯨嵐の夜は歌を歌うな」や「眠れずにピアノソナタを聴いている海では鯨しやちがたくさん死んだ」というような歌にも窺える。

なお、生命の実相を凝視する際に冴えを見せるのに対して、政治的なものを取り込んだ際には凝視や熟考に欠ける。それは例えば、「我々が誇りにしていた憲法の不戦の誓いは幻想だったか」や「ぐらぐらと平和憲法揺さぶらる我々は夢を見ていただけなのか」などに示されている。分かり易くはあつても、平板であり鋭い問題意識が効果的に表出されているとは言えない。いわゆる時事問題に触発された短歌には、思いつきのレベル以上の深みやひねりは感じられない。憲法改正となれば、戦争によって命が脅かされるということが込められているのであろう。だが、歌自体は通り一遍で社会通念をなぞつたに過ぎず、インパクトに欠けるのである。

表題を「萩」と付けたのは、「雨もよい障子を練れば白萩がこぼれるほどに枝に盛らるる」や「雨を含み地に届きたる萩の枝えはこぼれるほどの光を養う」等の萩を詠んだ歌があることに因るだろう。秋の七草の一つで、ひっそりと紅紫色に咲くところに引かれたのだろうし、鹿鳴草・風聞草・月見草・庭見草な

どの異称にふさわしいたすまいを持つところに引かれたのだろう。それは、「野の花のように端然と、地に足をつけて生きられる境地」（『日本人への祈り』）への願望の投影と言い換えることもできよう。

三

次に『四季』の中で、生命科学的な視点から詠まれた歌について見ていく。また歌集としての内容や評価にも言及したい。『四季』には次のような歌が収録されている。

芋虫が造られるのおんなじに脳なみだができるいのちの不思議
飼犬の遺骸を埋めしその上に実生の椿が育ちはじめる
死してまた何かに生まれかわるわが分子輪廻転生宇宙は深し
分子生物学は終わったという息子にいのちをいかに語らん
ラヴェンダーの花叢が孕みしじみ蝶生まれて空に吸われ
ゆきたり

一首目では、思考する脳が、蝶や蛾の幼虫である芋虫と同様の細胞から成り立っていることに生命の不思議を見ている。そこから思考する脳を持ち、知性的な存在であるヒトとはどのような生き物なのかという問いかけに及んでいる。二首目は、犬の死骸の養分を吸収してまるで椿が育っているかのようなことを想起している。そこには、梶井基次郎の「桜の樹の

下には」に描かれた、桜が樹の下の死体の養分を吸収するのと同様のイメージが定着されている。死と生、醜と美、動物と植物が効果的に対置されている。「実生の」ということで種子から芽を出して生長するということで、転生のイメージにもつながっている。椿は栄養分を吸収することで生命活動を継続しており、生と死が循環していることもイメージとして定着している。三首目では、分子のレベルで生命の転生を捉えている。これは柳澤が『生きて死ぬ智慧』（平16、小学館）の中で、般若心経について述べたことに重なっている。つまり、「色即是空／空即是色」という仏教の教えは、現代の分子生物学が解明したことに通うというのである。存在自体である「色」とは、分子の集合体にすぎないから「空」であり、「空」もまた分子のレベルで捉えると実在しているのであるから「色」であるという捉え方である。結句に示されたように、柳澤は分子という目に見えないものに関心を覚える一方で、すべてが存在する宇宙という空間への強い関心もある。四首目では、息子が何をもち「分子生物学は終わった」と述べたのかはつきりしないが、そのような我が子に生命の大切さを説きたいというのである。息子はゲノム研究などで細分化し過ぎた分子生物学の問題点を指摘したのかもしれないが、柳澤は生命そのものの研究につながるという原点を伝えたいのであろう。特定の化学分子の単独あるいは相互作用による生命現象の解明は、今後とも発展・進

歩するだろうが、「いのち」と呼ばれる観念の説明については、恐らく現在と同様なジレンマが続くだろう。文理融合した総合的帰結が必要となるだろうが、いかに語るべきかということについて、柳澤はまさに過渡期ゆえのジレンマを感じているのである。五首目では、母胎であるラヴェンダー畑で、しじみ蝶が卵から蛹を経て成虫に至るまでを描いている。一方でこの歌については、ラヴェンダーの花から出て来たしじみ蝶を、まるで花から転生したかのように捉えた」と読むこともできよう。それは動物も植物もどちらも分子レベルで同じものと見て、メルヘンとして少しロマンチックに捉えた場合である。作者の資質から、前者と捉えるのが妥当だろう。なお、花は虫に蜜を与え、虫は花を受粉させるといふ生き物同士の共生の戦略を作者は知ってはいても、それはリアルすぎるのでこの歌では言及していない。

今日一日ゆるされてあるこの星に沈丁と木瓜が咲きかけて
おり

寂しきは古き脳から出ることと思えば小鳥も犬も寂しからん
花びらがひとひらひとひら地に還る梅は吹かれて実りに入る
植物に脳なづきなきこと思いつつロシアン・ジェイドを静かに綴る
庭にきて三羽の雀が米を喰む物食うことは悲しきことなり
一首目では、植物が花をつけるところにありがたみを覚えており、そこには「今日一日ゆるされてある」というように研ぎ

澄まされた病者の感性が透けて見える。ヒトとして辛うじて生きている作者は、花を付け子孫を残そうとする眼前の植物を見ているが、束の間の生を生きるということでは同じであり、そこに主体と客体との不思議な混交が意図されている。生きて在ることへの慈しみに満ちた歌であり、作者の至りついた境地を窺うに足る一首である。地球を「この星」と客観化して捉えているところも独自である。二首目では、寂しいという感情は本能から生ずるものであり、知性を持たない小鳥も犬も本能だけで生きていたので寂しいだろうと思いを馳せている。三首目では、梅が花を咲かせ実をつけて子孫を残すという植物の生命活動を描いている。二句で「ひとひらひとひら」と平仮名で繰り返して表記することで、一枚ごとに花の散るさまを描き出している。四首目の「ロシアン・ジェイド」とはロシアで産出された翡翠のことだが、豆のように濃く深い緑色をしている。植物と同じ緑色をしていることも、植物の脳への連想として働いただろう。なお、パワーストーンとしても知られており、心身の不調を緩和し癒してくれながら仕事への取り組みを手助けしてくれるとも言われている。同集には「夜の庭で樹は黒くなり知恵をつけ私の夢をのぞき見ないか」という歌もある。植物に脳はなくとも、意識はあるのではないかという考えが、作者の根底にあることが窺える。五首目では、物を食べる雀の姿にあらゆる生き物の哀しみを投影させている。雀の姿を捉えながら自

分自身を含めたヒトのことも描き出しており、主客融合した光景と言える。

地球上にいくつの目玉があるのだろうヒトの目ムシの目プ
ラナリアの目

もろもろの生き物たちと隔てたり囲いの中に住むホモ・サ
ピエンス

幾十年ともに暮らせば木とわれは言葉なくとも互にわかる
生物が三〇〇万種いるという地球の上で私も一種

海豹あざらしの胎児に瞳ができるころ海よ静かにさらさら歌え

一首目では、生き物の目の違いに焦点を当てており、ヒトの目と対比するために、複眼である昆虫の目を挙げています。同集には「蜻蛉とんぼには私がどんなに見えるのか覗いてみたい複眼のなか」という歌もあり、蜻蛉の眼に自分がどのように映っているのかということへの関心が窺える。結句で扁形動物のプラナリアを取り上げたのは、再生動物としてよく知られているので目はどうなっているのかという関心に依るだろう。再生の実験材料としてもよく知られているため、目の再生というようなことも興味を引いた要因と思われる。因みに、普通の生き物は進行方向に目が付いているが、暗所を好むプラナリアでは、目は光の方向を感じるための器官なので頭の方でつべんに寄り目で付いている。二首目には、他の生き物と分け隔てて閉鎖された空間に棲むヒトとは、いったいどういう生き物なのかという問いか

けがある。それは、文明社会を生きる私達の幸福観に対する鋭い問いかけである。現代人とか人間とか言わずに、「ホモ・サピエンス」と記したところに、進化の歴史を経てきた人類たちという思いが込められていよう。危険から隔離され、安全で快適な空間に棲む現代人の在り方について客観的に描写している。三首目では、木と何十年と一緒に暮らして来たので以心伝心のようにお互いに理解できるというのである。四季折々の微妙な気候の変化に添って共に生きて来たので、お互いに分かり合えるような気がするというのであろう。四首目では、ヒトは地上の三千万種の一種にすぎないという思いが詠まれている。そこには、三千万分の一という具体的な数値をあげて、ヒトという生き物の傲慢さを戒める謙虚さが込められている。五首目では、海棲哺乳類である海豹の胎児の成長を願い、海に平穏であってほしいと祈っている。海が穏やかなまま、「海豹の胎児」を守るように願っている。三句で切れて「海よ静かに」と強調し、「さらさら歌え」と続く措辞は巧みである。現実の目に見える世界よりも、その彼方にあるもう一つの真実の世界を、知性と感覚と想像力で浮かび上がらせた佳作と言えよう。なお、胎児については、作者の脳裏に、ヘッケルの「個体発生は系統発生を繰り返す」というような、魚類から哺乳類に至るまでの生命進化の歴史も連想されていたと思われる。^{注5} 生命の起源としての海は、生命を育む母胎でもある。

この歌集には、「半生を病み過ぎしことははかなくてなせざりしことのしきり思わる」というような病気ゆえの悔いが根底に一貫してある。「来世も寂しく咲かんゆきのしたわが今生のありしごとくに」という歌もあり、ひっそりと生きた現世の在りようと多年草「ゆきのした」とを重ねて捉えた境涯詠としても示されている。「わが今生」という自己規定に銜いや嫌味が感じられないのは、作者の実感が素直に表出されていることに依るだろう。因みに、「雪の下」は湿った所に生えて夏に白い花をつける地味な花であり、この歌に詠まれた心境に合致している。

一方で、「工夫らの帰りしのちのクレーン車夜中にきつと恐竜になる」や「虫たちにメルを打とう『いつまでも眠り続けよ、いのちは辛い』」のように、メルヘンとも思える自在な境地を詠んだ歌もある。辛い病床にあつて、心を自在に遊ばせることも、苦を沈め生き延びるための術であろう。それが歌に反映し、効果的に働いている。

歌集『四季』は、「秋」「冬」「春」「夏」「雑」の五章から構成されている。冒頭に「秋」を置いたのは、植物の紅葉や落葉など滅びの美への関心からだろう。冬の厳しさから春を迎える喜び、そして生命の絶頂期である夏へと展開している。四季の中でも、凜とした冬の光景を詠んだものに秀歌が多い。『四季』には表題の通り、二十四節気の「寒露」「冬至」「小寒」「大寒」なども歌言葉として取り込まれている。そこには、季節の推移

に敏感な作者の感性が窺える。一日一日を祈るように生き続ける作者にとつて、周りの自然風景の推移はかけがえない貴重なものなのである。

集中に「今生に最後の本を書き終えて生の終わりを潤みて見つむ」とある。また、「あとがき」にも「私は『音』（歌誌―引用者注）に属していて毎月十首を投稿するきまりがある。その締め切りに束縛を感じるのである。何も束縛のない人生。私の大好きなオペラや室内楽を聴き、本を読むだけに浸って生きることは二度とできないこと」で中途半端は好まないと記している。それは読者としては辛いことではあるが、作者の一生に関わることなので難しいところがある。それにしても、もし本当に『四季』が「最後の本」となるのなら、文筆家としての潔さに感服する反面、これまで蓄積してきた歌人としての覚悟や技量を今後も粘り強く継続してほしいという思いも根強くある。

四

柳澤の短歌には、難解な思想や表現が盛り込まれているわけではない。そこには、自己の思いを直截に平明に表した言葉が綴られている。柳澤の短歌はあくまで自己にこだわるために、写実的な短歌と同様のリアリティを獲得している。自己の体験

や見聞にこだわるゆえの強みであり、その視点から現実を認識する強みである。写実的な短歌はあくまで個人の体験に固執するところに特質があるが、柳澤は個人の体験にこだわりながら、一方で生命科学的な視点からヒトという種の特質を捉えるために、鳥瞰的立場から自己の見聞を相対化し得ている。生命科学の知見を踏まえているために、生命とは何か、死とは何かという問いかけが常にあり、その歌は形而上的な性質を帯びたものになっている。そのようなところに、柳澤作品の特質があると言える。それは斎藤茂吉が「短歌に於ける写生の説」で述べた「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」という境地に通うと言える。茂吉にとって短歌はまさしく「いのちのあらはれ」であったと同様に、柳澤にとっても「いのち」は最も重要なキーワードなのである。生命についての徹底したリアリズムで両者は共通しているながら、認識の背後に茂吉には精神医学があり、柳澤には生命科学がある。

柳澤は闘病を宿命として受け容れているため、歌には悲哀と諦観が込められている。しかし、その眼はいささかも曇らされてはおらず、冷徹なりアリズムで人間を含めた生き物の生存の実相を活写している。

柳澤にとって四季折々の植物や動物の生命活動は、まさに人と同じ遺伝子から成る同朋という視点から捉えられている。そこには、あらゆる生命への賛歌や哀切な無常感が込められてい

る。無常といっても、分子のレベルで捉えているため形態が変わるにすぎず、生命現象は継承されると達観して捉えているところもある。

『秋』にも『四季』にも、白を素材とした歌が多い。例えば、「今生は病む身に耐えて生き抜こう後生は白い椿になりたい」(『秋』)や「まっ白い手まりのような紫陽花を生きたればこそ愛でつと思う」(『四季』)等に顕著に示されている。柳澤にとって「白」は、癒やしとして救済としての色であると思われる。また、「生き物」では「蟬」を素材とした歌が多い。夏の炎天下に短い命を燃焼させているところに、命の実相を見る思いが反映しているのであろう。

ところで、先行歌集の『冬樹々のいのち』には、
しろじろと池の面に敷く花筏はないかた風の寄すれば淡く色づく
捕らえられ食われる蝉の声やみてハイビスカスは燃え盛る
なり

生きるという悲しいことを我はする草木も虫も鳥もするなり
というような秀歌があった。また『いのちの声』にも、

うぐいすの初音したたるこの星に許されて在りこの春もまた
川底の魚の卵にふたつずつ眼の育ちゆく春になりたり
大空の縮みゆくほど寒い日は火を燃やそうよホモ・サビエ
ンス

というような秀歌があった。これらの歌では、繊細な感性で

生命の実相を冷徹に捉えている。生命についての写真とそれを歌として象徴させることが、極めて高いレベルで統合され、硬質の叙情として表出されている。それは斎藤茂吉や正岡子規の短歌と比肩すべきものと述べても過言ではあるまい。子規と同様の「病床六尺」の限られた空間を宿命としたことが、柳澤の想像力にむしろ効果的に働いている。あらゆる生き物の生命進化的時間と空間の歴史を、想像力によって捉え得ているからである。無論その裏には、社会性や政治性の欠如という側面があることは否定できない。

勉 田 和

『冬樹々のいのち』や『いのちの声』の延長で、『萩』や『四季』も詠まれている。しかし、強く印象に残る秀歌は、むしろ少なくなっている。これは、作者の感性や想像力が心身の衰弱と共に常識的に平板になっていることが考えられる。また、短歌という形式に凝縮する際の緊張感やリズム感も、従来に比べて乏しくなっている可能性がある。生命科学につながる用語もなまのまま提示されているものもあり、作者の内部で必ずしも熟成されているとは言えない。なお、歌集以外の評論や随想でも、根を詰めた力作と言えるものは少なくなっている。

ところで、細かなことではあるが、『萩』の中に『冬樹々のいのち』に収録の短歌を再録していることは問題を残している。創作者として歌人として、歌集というものをどのようなように認識しているのかということである。『冬樹々のいのち』は歌画

集だから、厳密には歌集ではないと言いたいのかもしれない。また『萩』の「あとがき」に記されたように、他の歌人からの助言をそのまま受け入れたのかもしれない。それにしても、読者への配慮に欠けるし、作者として独創的な表現や発見を提示することを心掛けるべきであろう。『萩』の「あとがき」に「私の短歌は人に見せるためのものではなく、あくまでも自分を表現して、自分を慰める喜びの手段である」と記していることを理解した上で、出版する以上は、創作者としての見識や決意が問われるだろう。歌自体が普遍性を獲得するほどの高い境地に達していると思われるので、あえてこのようなことも付け加えるのである。なお、柳澤は『日本人への祈り』の中で、「私の場合は、読んだ方に共感を持つていただきたいという気持ちがいちばん強い」とも述べている。読者の共感を得るためにも、歌集編集の際にはやはり周到な配慮が必要であろう。

注1 永田和宏は「柳澤桂子歌集『萩』によせて」（『萩』序文）の中で、「柳澤さんの歌が文筆家の余技として見られているとしたら、それは残念なことである」と述べている。

注2 『萩』の「あとがき」に、「歌画集『冬樹々のいのち』のなかの歌は、このなかに取り込みました」とある。

注3 柳澤は『日本人への祈り』の中で、論述機能の言葉とイメージ喚起機

能の言葉は、脳内で出て来る場所に違いがあることにも言及している。

注4 マンモス絶滅の原因は諸説あるが、主なものは一、氷河期の気候変動による植生の変化。二、ヒトの祖先による狩猟。三、伝染病の流行等である。なお、柳澤は『いのちと環境 人類は生き残れるか』（平23、筑摩書房）の中で、「私たちの文明はすでに『行き過ぎ』でいて、このままでは立ちゆかなくなることは明らか」と述べている。

注5 柳澤は『いのちと環境 人類は生き残れるか』の中で、ヘッケルの言葉引用した後、「受精卵が胎児になって生まれるまでに、生物が四〇億年かけて進化してきた過程をくり返す」ことに言及している。

注6 歌集『萩』でも、「立春」「啓蟄」「処暑」「冬至」などの二十四節気が歌言葉として取り込まれている。

注7 『いのちの声』にも「誰ひとり帰りしことのなき道の白きが上をほとほと行く」という歌がある。ここには浄土真宗などでよく引用される「二河白道」の喩えが連想されよう。柳澤にとって「白」は清浄なものとして、宗教的な要素も含んでいると思われる。